旅立ち

社会福祉法人しらとり会
利用者通信（NO．６６）
令和２（2020）年12月１日発行

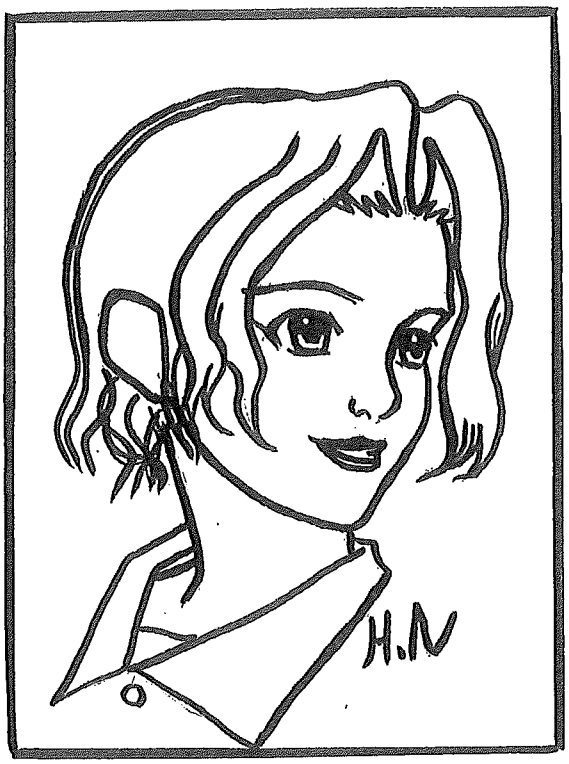
今月は、５名の方からの投稿です。

落語・相の手都々逸

・「合唱団を凍らせました」。
（で、どう成りました？）
「皆、こうらすに成りました」。

・「神奈川県全体を凍らせました」。
「皆、あつぎに成りました」。

（岡本　祐子）



1986年 ー同志社大学卒業後の話ー（その４）

ー1991年の事ー

いい加減な気持ちだから、バチが当たったのだと思いました。そうこうしているうちに、1991年の７月に父が脳梗塞になり、寝たきりになりました。それで枚方の病院に入院し、７月から10月６日までICUに入れられましたが、その甲斐もなく、亡くなりました。1991年10月６日、父の祥月命日です。枚方で葬儀が行われました。母が喪主でした。父は享年70歳、母58歳の時でした。関西医科大学で亡くなりました。僕は、30歳で何も力になることができなくて、弟は、27歳で結婚直前でした。訳の分からぬまま、時は過ぎてゆき、賀茂精神医療センターへ入院する事となりました。

（YY）

○精神科医の判断基準は自分の狭い経験に過ぎない。

○精神医学の理解も運用基準も自分の経験をもとにしなければ出来ない。

○精神疾患の治療の根本である親子関係も精神科医自身の親子関係が基準になっている。

○要するにある親子関係がその他の親子関係に当てはまるとは限らない。

○当てはまらない場合治療にならない。

○狭い経験でものを語ってもまるで意味がない。

○勤務医はバックの保障から患者に頭を下げない。

○お金を出している者に頭を下げるのは商売の鉄則である。

○患者が来ないのは患者の責任。

○ビル診療が続く。

（加藤忠男）

【投稿の募集】

読んでいただいた方からのご感想をお寄せください。また、利用者の皆様からの投稿をお待ちしています。

次回の締切は、12月15日（火）です。

『旅立ち』編集委員：加藤、本川、A.-Z.、H.A.